

## 第一部 基調講演「阪神・淡路大震災を語る」（詳録） 講演者：秦 詩子

只今ご紹介に預かりました、秦詩子と申します。神戸で被災し、現在は語り部の活動をしています。

さて、当時、神戸の人達は、神戸に地震が来るなんて誰も思っていませんでした。今は日本中のあちこちで地震が起こっていて、この間は東日本大震災で大きな津波が来たりしてしまっていて、大きな災害は次から次へとやってきています。

ですので、皆様の中もすでに色々と勉強されている方も多いと思います。先ほどの開会挨拶でお話があったように、皆が知識を持っているというのはとても大切なことだと思います。

まず、私が阪神・淡路大震災を被災したのは、神戸市東灘区の深江という場所でした。高速道路が倒れた側といえば、よくお分かりになるでしょうか。すごく大きな被害のあったところでした。

まさか高速道路が倒れるなんて誰も思っていませんでした。皆様も、写真を見たことはあるのではないのでしょうか。阪神・淡路大震災から丁度20年が経過するという事で、今、色々と報道されています。私達が語り部として所属している、人と防災未来センターでも色々な企画がされていますが、20年も経過したということで、私も心の日常を取り戻したと感じていましたが、昨今の盛んな報道を目にすると、今でも以前の状態に戻ってしまいますね。自分でもおかしな状況だと思うのですが、こうした記憶はなかなか消え去るものではないのだと思います。あの時に友人の赤ちゃんが亡くなった、双子のもう一人の子は無事だった。その子が今、二十歳の成人式を迎えるということを知り「ああもう20年経ったのか！」と改めて深く思っています。

私が阪神・淡路大震災でどういう体験をしたか、お話ししたいと思います。

私は先ほどお話ししたとおり、高速道路のすぐ側のマンションで被災しました。10階建ての6階に住んでいました。わざわざ何故「6階」ということを申し上げたかということ、あの時のビルの倒れ方は、例えばビルが途中の階からポキンと折れたところがありました。また隣のビルに寄りかかりドミノ倒しのように倒れたところもありました。そんな中で私が一番驚いたのは、例えばビルの1階が潰れたというのであれば皆さんも想像が付くと思うのですが、その中で途中の階だけが潰れて6階建てのビルが4階建てのようになった、というビルが結構あったことでした。

そんな状況で、私達のビルは幸い、中間の階は潰れはしなかったのですが、中はまるでミキサーにでもかけられたようにメチャメチャになってしまいました。

平成7年1月17日の朝5時46分は真冬の早朝でしたので、まだ外は暗く夜は明けていませんでした。

私はまだ起きておらず、布団の中にいました。もし私があのとき、防災の勉強をしていたなら、恐らくもう少し安心な場所に寝ていたと思いますが、関西は本当に地震のないところで、「地震なんか来ない！」という思いもあり、また当時の家にはウォークインクローゼットなどは少なく、私が寝ていた部屋の両脇に家具が並んでいました。また、ビルを建てる側にも関西には地震は来ないだろうという思いがあったのか、リビングとダイニングの間には大きな飾りガラスがはめてありました。今思うとなんて危ないことをしているのだらうと思うのですが、当時はちょっと豪華な感じでした。

そうして、朝の5時46分ですから、もう少しで起きるという時間です。私の目は覚めてしまっていて「ああ寒いなあ、もうぼちぼち起きなければ」と思っていました。主人は既に起きていて、ガラス戸のあるリビング

グで新聞を読んでいました。息子は自分の部屋にいました、息子の部屋というのは勉強机や小さなタンスがある程度で、一番安全な場所だったかもわかりません、一番危ない部屋は私の部屋でした。こうした状況で地震がドーンとやってきた訳です。

皆さんは地震というのはグラグラ揺れるというイメージだと思うのですが、あの時はもう何というか…もう何メートルも落とされたような感覚でした。とにかく爆発的な揺れでした。それに私達は地震の体験がなかったものですから、とにかく「なんだ!？」という感じでした。

私は咄嗟に身を丸くして布団の中にくるまった状態になって小さくなりました。あの時の揺れ、震度7の揺れというのはどういうものかという、例えば自分の体がピンポン玉になったと想像してください。そのピンポン玉をバケツの中に入れて揺すったと思ってください。そういう揺れだったのです。ですから、自分の意思で動くことができませんでした。私はもう「神様!」って思いながら身を堅くしたままボンボンと揺れていました。

さて、最初に私の上に落ちてきた家具が和装ダンスでした。和装ダンスというのは、着物を入れるようになっていて、その前に開き戸が付いています。その開き戸が開いて私の上に落ちてきたのです。その開き戸がつかえ棒の役割をして、少し空間を作ってくれました。私は丸く小さくなっていたので、そこにすぽとはまりました。このお陰で、今、私はここにこうして立ってられる訳です。あの時私の居た場所がちょっとでもずれていたら、私はここには居ないと思います。あの時、6434人の方が亡くなったと言われていますが、80%以上、90%近くの方が圧死により亡くなっています。家の下敷き、家具の下敷き、そしてブロック塀の下敷きなど、物の下敷きになって亡くなっていらっしゃる。ですから、私もその仲間入りをする予定だったかも知れませんでした。

とにかく、同時にライフラインはすべてアウトになりました。私達のところは被害が大きかったので、水道は3ヶ月復旧しませんでした。水道のない生活を3ヶ月、ガスは2ヶ月ぐらい、電気は1週間ぐらいで復旧しましたが、電気というのは今思うと家がなければ役に立ちませんね。私達は家から放り出された状況だったので、「電気が復旧したよ!」と言われても使うところがないのです。そういう感じでした。

また、同じ神戸といっても、地域によってすごく違います。ほとんど被害がなかったところもあれば、私達の地域のように大きな被害があった場所もありました。恐らく、私達のところが一番被害が大きかったんじゃないかなと思います。

それで、とりあえず地震直後の私は「体が重いな。」と思いながらも小さな空間から這い出したわけです。外はまだ夜が明けてないので真っ暗、家の中も真っ暗、つまり暗闇の中なんですね。なので「今何があったんだ?」といった感じでした。お互いに家族同士声を掛けられたという時間だったことがラッキーでした。つまりすぐに命の確認が出来たのです。

また、真っ暗で何も見えなかった、というのは逆に良かったですね。つまり家族がお互いに「今のはなんだ!?!」「今のなに?」といった具合で、誰も何が起きたかわからずに、つまりパニックに陥ることがなかったんです。今だったら、これが大きな地震だということがわかったと思うのですが、当時は地震の経験がなかったものから、とにかく何が起きたかわからないという所から先に思考が働きませんでした。それでとにかく「何だったのだろう」という感じでポカンとしていました。

そのうちだんだん暗闇の中で目がなれてくると、リビングとダイニングのところに黒い山が出来ているのがわかりました。「家の中に山があるのはおかしいなあ、こんなあったけ?」と思いました。それは後からわかったことですが、部屋の両側から飛んできた家具がそこに集まっていたわけですね。

あのときの揺れで、大きな冷蔵庫の蓋が開いて中身が飛び散ってゴロンと転がっていました。それから本

棚の本が本だけ先に飛び出して離れた場所で山になっている。本棚は潰れている。家の中はそんな状況でした。

その時は、とにかくポカンとして、家族3人それぞれの部屋で「今の何だったんだろうねえ？」という感じで居ました。

私には息子が2人いて、長男は野外活動が好きで、部屋にはテントや飯ごう炊さんの道具が一杯で手狭だったので、近くのアパートの1室を借りて、物置き兼、子ども部屋として借りていました。その子が走ってマンションの6階に上がってきて、ドンドンと戸を叩いて言うんです。「お母さん！早く逃げないとこのビル倒れる！」って叫ぶんですよ。

中にいる者は「うそ、ビルが倒れるわけないじゃん。」「そんなんあり得ない。」「何を大げさな事言って、潰れるわけがない。」とそういう感じで中にいる者は受け止めるんですね。ところが外を見てきて走ってきた人間は必死なわけです。「早く逃げろ！」と言うんです。

それであんまりワーワー言うので仕方ないから「じゃあ、逃げるう？」みたいな、そんな呑気な感じで「じゃあ逃げようかなあ」と思って動こうとしたら、入口にいる次男が「動くな！」って言うんですよ。

「どうして？」って聞いたら「歩いたら足を怪我するから僕がここから靴を投げるから。」って言うんですよ。当時は思わなかったのですが、今思うと「賢い息子やったなあ！」と思うんですよ。「お母さん、じっとしとれ」って言う訳ですよ。

それで「靴を投げる」と言われても、隣の部屋からこっちまで靴を投げる訳で、暗くて見えないし、どこから飛んでくるかわからない。「そんなん私受けられへん」って私が言ったら次男が「お母さんが手を出したらシルエットでわかるから、そこ目掛けて投げるから。手に何か当たったら握ったら良い！」ってそう言うんですよ。

私も「手に何か当たったらって、そんなん出来ますかいな」と思ったんですが、あの時、両手を出して投げたものを、無事にキャッチしているんですね、今思うと失敗しないで。

それで、投げてもらった靴を履いて、ジャリジャリ音を立てながら廊下を歩いて玄関まで行きました。

さあじゃあ逃げようかと思ったら今度は玄関が開かないんですね。あの時マンションに住んでいた方が沢山中に閉じ込められました。というのは、ドアがもう歪んでしまって開かないんです。そこで私達は外の長男と中の3人とで必死にこじ開けて、やっと隙間を作り外に出ることが出来ました。

先ほど申しましたが私達の住んでいるマンションはすぐ近くを阪神高速道路が走り、その下を43号線という大きな大きな国道が通っています。ですから常に道路に車の行き来があるわけです。常にやかましい音があるわけです。

ところがその時、下へ下りたらなんと、シーン！と静まり返っていました。音がないんです。私、あの時「えっ、何これはどうなった！？」って思いましたね。音が無いなんて、今までどんな静かなところに行ったって、こんな事はありえなかった。あの時は、本当に音が無かったんです。

それで、皆出てくる人も何も言いません。ポーっと出てくるんですね。私も何が起こったかわからないからポーっとしてました。

そのうち、だんだん夜が明けるに従って色々と見えてくるんですね。すると「いつもと景色が違うぞ。」。神戸には六甲山という山があるのですが、その六甲山がスーッとよく見えるんです。見晴らしがすごく良いんです。「あれ今日はえらく六甲山よく見えるぞ」と。

それから東を見ても西を見てもとにかく向こうまで見渡せるんですね。「あれどうして今日はこんなに見晴らしがいいの？」って。そしたら周りの家が全部潰れていたんですね。

あのときの被災状況の地図が、今は「人と防災未来センター」の資料で見ることが出来るんですが、まるで大蛇が通ったように周囲の家が潰れていました。

ですから、こういう不思議な場所がありました。道一本隔てた手前の家々は全部メチャメチャに潰れているのに、道路を隔てた向こうは全部残っているんですね。つまり大蛇が通った後のように、まるで線でも引いたように建物が潰れていました。その大蛇の通り道の真ん中に私達のマンションがあったということなのです。

私達のマンションも1階は潰れてしまっていて、またどンドンと襲って来る余震のたびにマンションがどンドン傾いていきます。一見したら今にも横倒しになりそうな、そんな状況になっていました。

私達はとりあえず、そんな危ないビルには入っていきませんから、車がある人は車に避難、近くに建っていた小さな集会所にはお年寄りとか子どもが避難しました。私達のような元気な人達は車に避難しました。

… 私がこうして皆さんに震災の体験をお話出来るようになったのは、震災から8年経ってからのことでした。

8年間、本当に自分ではとくに元気になっている、そういうつもりだったのですが、8年目になって「ああ自分は本当に色んな人に助けられている。」そう感じた時に、「この恩返しをどういう形でしたら良いのだろうか？」「感謝の気持ちをどういう形でお伝えしたら良いのだろうか？」と思うようになったのです。その時に『人と防災未来センター』という施設が出来て、語り部を募集していることを知りました。その募集を見たときにふと、「語り部だったら、自分の体験を皆さんに聞いていただいて、生かしていただけるかも知れない。何かのヒントにいただけるかも知れない」と思い、「語り部をやろう！自分に出来ることからやってみよう！」と思いました。

そんな折、友人に「今度私、語り部をやろうと思うんだ」と話したところ、その友人が「人前で喋れるようになってよかったね！」って言うんですね。私なんかとうの昔に元気になっている、そんなつもりだったのですが、8年間元に戻れていなかったんですね。

そこでふと気づきました。「そういえば家族の誰からも震災の話を出なかったな」って事に気づいたので。私は母親なのに息子たちから当時何をしていたか聞いていなかった。息子達はどうやって今まで過ごしてきたのかを、全然知らなかったのです。「それでは私は母親として失格だ」と思い、息子たちに当時の事を聞いてみようと思いました。そこで長男に「今度、お母さん語り部やろうと思う。あなた達の体験を参考のために聞かせてくれへん？」って聞いてみたのです。すると長男は、8年経っているのにも関わらず、「お母さんよく語り部なんかやれるなあ！」って言うのです。私はドキッとしました。「うわ、語り部やったらいけないのかな」と。そしたら長男が言うんです。「僕は震災の話なんか出来ん！ 思い出すのもいやや！」って言うんです。それを聞いて、「どうしよう、息子にも何かあったんだな」と私は思いました。

私も色んなことがあった。8年間立ち直れなかったのですが、息子にもあったんだと。でも思い出すのも嫌な子に聞く訳には出来ない。その場はそっとしておきました。

それから1年、2年と語り部を続けていくうちに、息子が当時を言うようになりました。

「お母さん、当日僕ら兄弟は、近所の人と一緒にあって、ガレキの掘り起こし作業をしとったんや。」って言うんですね。私思わず、「うわあ、わが息子ながら良いことしてくれてたなあ。人の命助けてくれてた

んだ。有難う。」って言ったんですね。すると息子がこう言うんです。「お母さん、何を言うてるの？ 僕らが住んでいる東灘区というのは、一番死者が多いとこやで。」「ガレキの下からそんなに生きてる人が出てくると思う？」「僕らは亡くなった人を、道路に並べていったんやで。」って。「その中に、僕が幼稚園からずっと一緒だった親友がおった。親友のA君が、ガレキの下敷きで亡くなってたんや。」「だから、僕は震災の話はしたくないんだ。」って言うんですね。

私達の周りにも沢山の人が亡くなりました。一家全滅になったところもあります。もう本当に、ガレキはすぐには片付きませんし、自分たちの力、人間の力では動かしようのない埋まり方をしているところもあったんです。そんなところには、「ここに一人居ます。」と書かれたダンボールの切れ端が立っていたりするんです。

私達のところは本当に周りの家が全部潰れたものですから、なかなかガレキが片付かなくて、そういう風にダンボールが立っていたり、お線香が立っていたり、お花があげてあったりする場所が一杯あったんですね。

私達はそこを通りたくなくても、あのような大きな災害になれば、道路という道路がガレキで埋まってしまい、通るところが限られてしまうんです。ここは通りたくないと思ってもそこを通らなければ道がない。ガレキもすぐには無くなりません。遅いところでは何ヶ月もかかってしまいました。

そういう中で長く居たものですから、私も立ち直りが難しかったんじゃないかなと思います。

息子が言うには、あの、自分が居たアパートの周りから掘り起こしていった。でも一番奥の方は両方から家がぶさって来ていて、僕らの力ではどうしようもなかった。あの時、消防隊や自衛隊の人達はすぐには来ませんでした。これからも大きな災害があった時に、すぐに来てくれると思ったら大きな間違いです。救援隊はすぐには来れません。ですから避難所に行ったとしても自分の力で2～3日、いや3日、4日、自分の力で生き延びていくだけの用意が必要です。私達もそういう風に今は考えられますけれど、その時はそういう風には全然考えていませんでした。

2日後に消防隊の方が来られました。「そこに1人居ますから早く掘り起こしてあげてください！」と言いましたら消防隊の人が「たぶんもう駄目でしょう。」と。「『生きている』と声がある人を先に助けます。」とって通過したんですね。それでその方は自衛隊によって1週間後に掘り起こされました。

もちろん亡くなっていらっしやいました。でも、後でわかったことは、その方は3日間生きておられたということがわかったんです。その時に、周り者はどんな思いがするか、ということです。「あの時何故もっと粘って、消防隊の方を引き止めて、あそこを掘り起こしてもらわなかったんだ！」「そうしていたら、あの人は、今、生きていたかも知れないじゃないか！」「僕たちが殺してしまったんじゃないのか。」って、自分を責めてしまうんです。そして、私達の周りには、まだそういう思いを一杯抱えて生きてらっしゃる方がいると思います。小さなお子さんが、身内を全部亡くされて、今、本当に元気に逞しく生きていらっしやいますけど、あの時は本当にどうだったのだろうか、と思うだけで胸が潰れます。

さて、息子たちがそうした事をしている間に私は何をしていたかということ、まず、自分が生きていることさえ誰かに知らせる事が出来ません。通信が途絶えています。ラジオもテレビもありません。ですから、本当に何かを知りたいのですが、自分たちの目で確認できる場所のことしかわからないのです。なので、近くに小学校がありましたので、行ってみました。ところが既に、もうお昼過ぎの事だったと思いますが、教室には逃げて来た人で満員でした。運動場にも布団をかぶってガタガタ震えている人で一杯でした。体育館も勿論、でも私が行ったときにはまだそういう状況ではありませんでしたが、体育館は時間を経るに従って、

みるみる「ご遺体置き場」に代わっていくんですね。

大体、想像が及ばないんですよ。家が潰れていてもその中に人が居ることについて頭が働かない。ただただボーっとして私は小学校に行ってみたのですが、来てみて感じたのは「ああ、ここに来て居る場所はないな。」という思いでした。神戸市は人口が多いですから、寝ている人の頭のすぐそばに違う人の足があるという感じですね、ひしめいているんです、ギチギチに。これが人口密度の低いところだったら状況は違うのかも知れませんが、人口密度の高いところに行くと、本当に居る場所がないですね。

それで私は「ああ困ったな、居る場所がない。」そこでふと気が付くと、そこに行列が出来ている。そこで「この行列はなんですか？」と聞けば、「ここでお弁当を配ってます。」って言うんですね。それを聞いて私はビックリしましたねえ。「日本はなんて豊かなんだろう！」と。こんな惨状の中でもうお弁当が来る！

そこで、「朝から家族に何にも食べさせてないな、じゃあ私も並ぼう。」と思って2時間くらい並んだでしょうか、小さな稲荷寿司が5つくらい入ったパックをいただきました。家族は4人ですから「4つください」って言ったら、その人が「一家族ひとつです。」って言われたんです。その時に初めて「ああ、今日から食べるものが無いんだ！」って思ったんです。

それから慌てて駐車場に戻りました。友達や近所の人も皆、駐車場の車の中に避難していて、普段子供連れで一緒にキャンプしたり山登りに行ったりしていた友達に「どうする？今日から食べるものがないよね。」と言いました。そしたらその友人が「秦さん、皆に声を掛けてお米を取り出して来ようよ。」って言うんです。「ああ、お米なあ。」と、そこで、近くの奥様方に「使えるお米があったら家から持ち出して来て！」って声を掛けたんです。

取りに行くのは私も怖いですよ、なにせ余震が来る中でビルは傾いていますから、いつドーンと倒れるかなという恐怖心がすごかったですね。でも「頑張るって上がろう」って思って6階まで上がって行って、家の中に入って台所に行ってみたらグチャグチャで何がどこにあるかわかりません。ところが私は、お米を密閉容器に入れてまして、それが蓋も開かずには転がっていました。「ああやった！これ使える。」実は調味料も皆密閉容器に入れてあって、ですから後々それが使えました。

とりあえず、その時はお米だけです。必死です、お米とお鍋を持って下に下りました。

それから、潰れたところからブロックを調達してきて、すぐ近くに公園があったのですが、そこにかまどを作りました。さて、お米とお鍋は調達した。では何で炊くのか、お水はどうするか？ですよ。当時は今のようにペットボトルなどは用意していません。そこで破裂した水道管から水を汲みました。また、燃料はどうしたかという、潰れた家から木をもらって来ました。それを燃やして、公園で焚き火をしました。

そこで私達はご飯を炊きました。焚き火といっても柱をボンボン入れて、キャンプファイヤーみたいな事をしたのですが、そろそろ皆集まってきましたね。あの時は真冬で、皆が着の身着のまま放り出されていますから、皆、もうとにかく寒いんです。温まりたいんですね。火を燃やしたら皆黙ってじっと火を見つめながら当たっていました。

私達はそこでご飯を炊いて、キャンプみたいにご飯を炊いて、おむすびを作りました。ふと気が付くと、私達の前にダーッと行列が出来ているんです。「ここへ来たらおむすびがもらえる、温かいものがもらえる」そう思っちゃったんですね。私達は「自分達だけでも」と思っての事でしたが、「わーこれはエライ事や」と、「でもこれはもう私達だけで食べるわけにはいかん！」「持ち寄って来た物を皆炊いて皆に配ろう！皆同じなんだから！」と言って手がヤケドするくらいおむすびを作って配りました。

そしてその日からここで炊き出しをしよう。この小さな公園を拠点に炊き出しを始めました。最初は白湯

だけで良いじゃないの！と。本当に皆さん、今、着の身着のまま外に放り出されたら、どれだけ温かいものが欲しいか。私の格好だって、パジャマの上に息子のトレーナーを着て、その上から見ず知らずの人が「奥さん！私3枚ジャンパーを持って逃げてきたから1枚あげる」と言われてもらったジャンパーを着ていた。そんな様子ですから、もう寒いを通り越してますよ。ですから火のそばを離れられない、皆がそういう状況でした。

炊き出しを始めると、実は近くに大きな卸売市場があって、そこに勤めていた人が「秦さん、ここで炊き出しするんやったらどうせ市場の物は腐るのを待つだけやから、使えるものがあったら持って来るわ」と言ってくれました。またすぐ近くに中華料理屋さんがあって、その中華料理屋さんが「秦さん、沢山作るのには家庭用だと小さいからうちの鍋を使い！」って言うてくださって、そのお店は潰れていたのですが、中華料理用のでっかい鍋を持って来てくれたんです。

私は勿論、友達も「自分達の家族だけでも。」と最初は思っていたのです。ところがこんな大きなお鍋持って来られたら「うわ！皆の作らないかん！」ということになりますよね。そして最初にその卸売り市場から持って来てくださったのは、1月だったので正月用の物がまだ一杯残ってしまっていて、炊き出しに何が入ったかという、伊勢えびあり、鰯あり、鯛あり、蟹ありってそんなのが一杯入った、普段食べられないようなお汁が出来たんです。それで皆で「すごい豪華な炊き出しが出来たねえ！」って言いながら配っていました。

そうしているうちに役所の人に来て、「ここで炊き出しをするならここを避難所に指定します」と言うんです。公園を避難所にするのです。

その時、私は避難所の意味を知りませんでした。皆さんは当然勉強されているので避難所の意味はご存知かと思いますが、避難所という名前がついてないと、何も持って来てもらえませんか。避難所と言う名前が付いているからこそ物資がきます。ボランティアさんが派遣されます。ですから皆さん避難するときにはちゃんと避難所という名前の付いたところを確認しておいた方が良いでしょう。自分達でいくら力を合わせて炊き出しをしても、そこが避難所でなければ何も持って来てもらえません。それだけ避難所という名前には重要な意味があるんです。私達の場所は知らない間に避難所になっていましたから、物資を持って来ていただき、ボランティアさんを派遣していただき、色んな事を色んな人達に支えてもらったんですね。

私は、この公園でキャンプ用のテントを張って、4ヶ月以上生活しました。もうキャンプのテントは嫌ですね。そら自衛隊のテントなどはしっかりしていますから、1、2ヶ月は大丈夫かと思いますが、キャンプ用のテントなどは1週間もしたらもう水が入ってきます。上に防水シートを何枚も何枚も掛けて、下にも敷いての4ヶ月間。風が吹いたら飛ぶ、雨が降ったら入ってくる、そういう生活を4ヶ月間過ごしたのです。

そして私がその時、本当に周りで沢山の人が亡くなって、もう周りを見るのが嫌、周りに行くのが嫌、外に出て行けば訃報が一杯聞こえるからどこかに行くのは嫌、だからその公園だけでじっとしていました。すると、被災していない地域の友達が一杯来てくださって、「秦さん、薬持ってきてあげたよ！」「秦さん、うちのお風呂に入りにおいで！」「家探してあげよか！」「何か食べたいものがあったら言って。持ってくるから！」「下着持って来たよ！」色んな友達が来てくれたんです。本当にあの時は有難かった。

その時、私はやっぱり思ったんです。回りには色んな亡くなった方が居て、自分が潰れていたときに、そういう温かい言葉を一杯いただいた時に初めて、「ああ、人間って、人のぬくもりがないと生きていかれへんねんな。」「私はそういう友達が一杯居て良かったな。」「こんなに沢山の心配してくださる人が居たんだ。」「こんなところで潰れてはいけない！」と自分自身で思ったんです。

やっぱり、人間っていうのは、人のぬくもりをもらわないと、一人では生きていけないんだ。その時実感しました。

だから私は「やっぱり人のつながりはとても大切だ。」って思うのです。皆さん「つながって」というと何か物を持っていったり、どこかに一緒に行かなければいけないのかと思うかも知れませんが、そうではなく、『おはよう』『こんにちは』『お元気ですか』。要は言葉だけ、顔つなぎだけでも良いんです。顔だけ知っていたら、いざという時に何かが出来ます。

私達が炊き出しをしたときには、周り誰も知らなかった。手伝おうにも手伝ってもらおうにも声が掛けられなかった。自分達のご飯が欲しいから手伝ってくれる人が一杯居て、その人達はどこの誰かも最初はわからなかったが、その人達の多くが実は同じマンションの人だったって事に初めて気づいた訳です。

だからもし、あの時もっと私達がつながっていれば、一気に皆が一つの大きな力となって動けたのになと今は思うのです。ですから皆さん、ご近所の方、それから色々な会の仲間達のつながりを大切にしておいて欲しいと思います。

私も、それから色々な体験があって、お話したいことは山ほどあるのですが、今日はこの辺で終わりにさせていただきますと思います。

今日は本当にお話を聞いていただいて、ありがとうございました。